

## 南柯堂夢笑道人『法律詐欺』

——小説的側面を中心に——

### ノート

池田一彦

南柯堂夢笑道人こと萩倉耕造の実質唯一の純然たる小説作品は、『決闘状』（明治二十一年十一月十日出版、東京魁真楼蔵）であるが、これと踵を接して刊行された『<sup>法律</sup>詐欺』（明治廿二年一月三十日印刷、同廿二年二月四日出版、全百頁、定価十五錢、発行者 木田吉太郎、著作者 萩倉耕造、印刷所 応広社、東雲堂刊）も、半ば小説半ば判決文（これらにそれぞれ頭評が加えられている）の虚実両様向きの奇書であること、別稿にて触れた通りである。近々生ずべき〈詐欺〉の案件二十件を一般的な小説体を用いて披露しつつ、そのそれぞれについて法律上如何なる判決・刑罰が下されるかを漢字カタカナ交り文で示して行つたもので、詐欺を巡る物語と判決文、それに著者による評語と

いう要素が三位一体的に機能した取り合わせの妙の光る、一個の警世の書であるが、小説的部分のみを取り出して一編の犯罪（短編）小説集と見做すことも又可能であつて、本稿はその小説的側面の要約・紹介に若干の考察を加えることを旨とするものである。

本書の「凡例」に曰く、「本書ハ后来社会ニ出現スベキ詐欺ノ事実ヲ蒐録シ之レニ法律ヲ擬シタルモノナレハ書中裁判官檢察官其他人名地名等ヲ記載スルモ其実アルニアラス唯ダ之ガ名ヲ仮リ読者ヲシテ記憶シ安スカラシメントスルニアルノミ」、又曰く、「本書ハ詐欺ノ事実ト之ニ該当スル刑罰ヲ知ラスルノ意ニ出ルヲ以テ成ルベク件数ヲ多クセ

ンタメ勉メテ文辞ヲ省畧シタレバ文章ノ体裁元ヨリ完全ナ  
リトセズ且ツ擬律ノ如キモ勉メテ重複ヲ避ケ僅ニ其大要ヲ  
記載シタレバ読者幸ヒニ全篇ヲ通読シテ著者ノ僣漏ヲ叱責  
スル勿レ」と。更には、本書で詐欺犯を網羅してはいない  
ので、不日次編を出すこと、但し、本書一冊でもよく活用  
して油断することの無ければ「十中ノ九位以上詐欺ノ厄難  
ヲ免レ得ルニ幾カラン」と編者は記していて、以上が本書  
の性格をよく言い表わしていると言うことが出来る。「詐  
欺ノ事実」と言っても「后来社会ニ出現スベキ」もので



図1 『詐欺』表紙（国立国会図書館所蔵）

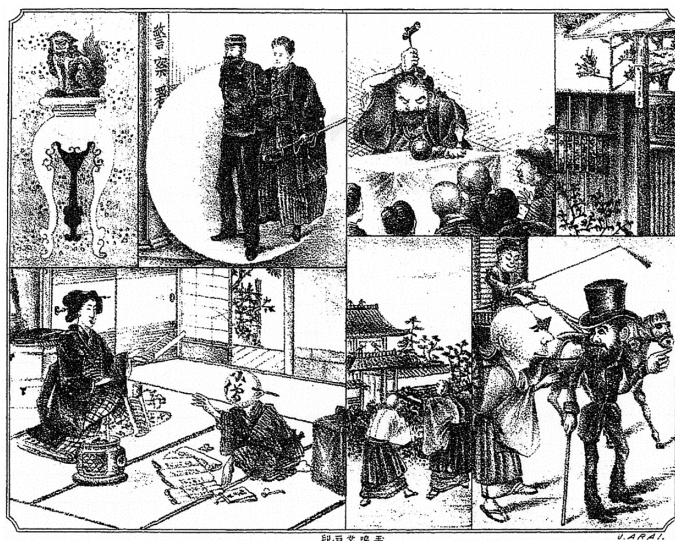


図2 『詐欺』口絵（同前）

あつて、即ち虚構であり、書中の固有名詞たるやこれ皆フィクションである。しかし、虚構でありながら、極めて実用性に富むものである、と言うのである。

では、本書の著・編者萩倉耕造（本文冒頭には「南柯堂夢笑道人戯著」とあり）の「序」について見るに、以下の如く述べられてある。

夫れ詐欺犯の社会を損害するや固より論なしと雖ども其原因を推敲するときハ詐欺に遭ふの原因を提挙すれば欲ふべからず今試みに詐欺に遭ふの原因を提挙すれば欲と余習と好僻との三種を出ざる者の如し第一欲とは食欲、色欲、其他自己一身に関かる利欲の爲めに惑はされ詐欺に遭ふ者にして比種類最も多きも皆是れ自から招くの所爲と謂ふべし第二余習とは我国封建時代に養成したる官尊民卑の習弊にして濫りに官辺を恐れ教ふの心より詐欺に罹る者なれば其愚痴又憐れむに堪へたり第三好僻とハ人各々其好む所に僻する爲め詐欺に陥しいれらるゝものにして道理の正しきを失ふに在り然り而して右の外正当の職務上より詐欺に遭ふ者あるは古人の所謂欺くべく誣ゆべからずにて如何んとも爲す

能はざる厄難に似たれども是れ又自己の油断に基因すと謂ふべし（中略）故に人々油断の心なくんば何程詐欺に妙を得たる悪奸も容易く其術を施す能はざるなり道人頃日徒然の余り戯れに詐欺犯二十件を蒐録し其後に之を所罰すべき刑律を摘示し読者をして平生此事実を記憶し詐欺に遇ふの厄難を免れしめ且つ同一詐欺犯にして擬律の数岐に分るゝを知り攻法の一助となし詐欺の罪惡たるを警戒せしめんと欲す（下略）

詐欺に遭う三つの原因を「欲」「余習」「好僻」とし、更に「油断」の大敵たることを強調しているので、本書の特色・目的をこれもよく言い得ているものと言えよう。

以下、「標目」に従つて『詐欺』全二十章を通して見て行くこととするが、本稿では特にその小説的側面に焦点を絞つて内容の紹介と考察等を進めたく思う。

## 「第一章 黄金の獅子」は、

恒の産なき人にして小才覚あるハ却つて其身を過るの種なりされば教育の輕忽にすべからざる亦論を俟たず

彼の孔夫子が恒の産なければ恒の心なしと申されしも万更<sup>ことごと</sup>理<sup>り</sup>なきにあらざ<sup>こ</sup>茲<sup>こ</sup>に記載<sup>きざい</sup>せる珍事<sup>ちんじ</sup>ハ東京浅草の片<sup>やまど</sup>辺りに住む山門才助とて年令<sup>ねい</sup>三十七八の人物ハ

云々と書き出されるのであるが、「茲に記載せる珍事ハ」辺の話の枕からの記述の運び（と言うか、寧ろ呼吸カ）は、明治二十年前後の小新聞の雑報にも実によく見受けられる戯作的筆法で（勿論、長編物、特につづき物毎回の枕にもよく用いられるのではあるが）、本書のような一話僅か数頁の短い物語の冒頭には滑らかな物語世界への導入に極めて効果的なものと言えよう。と同時に、本書中各挿話と小新聞の雑報との近親性・類縁性をここに見て取って良いかと思う。

さて、お話は……。見かけと異なり財産の無い山門才助を豪商古屋頑兵衛の長男放太郎が訪れ、吉原遊びに不足した二百円の借用の周旋を依頼、抵当の品として宝物蔵より盗み出した「金無垢獅子の香爐細工」を置いて行く。一計略案じた才助は、金銀細工人白沼作平方へ赴いてこの香爐を示し、類似の物を西洋人の所望だから、と地金は真鍮で形・重量同じ金鍍<sup>めつき</sup>の偽物の製作を依頼する。完成後、才助

は真物の方を携え、古物商須古井仁太郎方に到ると、これは真鍮だが先祖より伝わる物でと差し出すに、店主・番頭<sup>めきき</sup>鑑定して重み二百目の金無垢香爐を六百円余と踏み、真鍮と思い込んでいるらしい客才助より安く買い取ろうと企む。才助は、或る人が百三十円の値を付けたが、二百円なら手離すつもりと言えば、古物商が百五十円を提示したので、家内と相談とて一旦帰宅する。家にて金の首尾を待つ放太郎に貸し手は無かったと真物の香爐を返し、才助は今度は偽物の香爐を持って又ぞろ古物商を訪れ、家内とも談合の上百五十円で手離すことにしと言い、交渉成立、まんまと紙幣百五十円を手にする。十日程経て番頭はこの香爐を古物商集会の席で自慢半分鑑定させると、いよいよ真鍮と判明、才助に談判するも最初より真鍮と言った筈<sup>はず</sup>と言いつけられ、警察へ訴え出たのだった……。

吉原遊びの借金から始まる物語だが、放太郎の如きはよくある話、「黄金の獅子」の偽物作成から古物商への売り捌きまでの山門才助の手の込んだ「一計略」が所謂ミソで、古物商須古井の方にも充分悪どさが感得される。言わば「金」を巡って善人の一人もない、殆ど救いの無いお話である。

因みに、本章では、この後一連の裁判に至る流れが、延々七頁に亘って記述され（本題の物語の方は四頁弱であつた）、「裁判官 琴尾匡、弁護人 下賀良振、檢察官 国野為三、被告人 山門才助」などとして公判の様子、判決が叙されるのだが、その極く一部、最末尾のみここには例示して置くでしょう。

之ヲ法律ニ照スニ香爐ヲ販売スルニ当リ偽物ト変換シテ交付シタル所為ハ刑法第三百九十条人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ証書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト為シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ処シ四円以上四十円以下ノ罰金ヲ附加ストアルニ因リ同条ヲ以テ処断シ尚ホ全法第三百九十四条ニ因リ六月以上二年以下ノ監視ニ附スヘキモノトス

右之理由ナルニヨリ被告才助ヲ重禁錮六月ニ処シ罰金五円ヲ附加シ尚六月ノ監視ニ付ス 但犯罪ノ用ニ供シタル偽造ノ香爐ハ没収ス

民事原告人須古井仁太郎カ請求スル金若干円ヲ公訴裁判言渡ノ如ク理直ナルヲ以テ被告才助ハ速ニ仁太郎ニ弁償ス可シ

右言渡了局シ裁判官ハ此言渡ニ対シ不服ナルハ上告為スヲ得ベキ又言渡書ノ謄本又ハ抜書ヲ求ムルヲ得ル及ビ其期限ヲ告知シテ閉庭セラレタリ

予め断つて置くと、この詐欺事件を語つた小説的部分と裁判の処罰・判決部分の長さの比率は、本書全体で決して一律でなく、後者は総じて徐々に簡略化の傾向にあると言える。

更にまた、頭評の方も、最初ということ、これは本文の頭に付されたものを左に引用・例示して置こう。

○本章ハ貪欲ヨリ詐欺ニ罹ルモノニシテ世上其類少シトセス蓋シ正常ノ營業ヲナシ正当ノ利益ヲ得ルハ人タルモノ、本分ナルニ猥リニ不当ノ大利ヲ僥倖セントスル時ハ反ツテ損害ヲ蒙ムル必然ナリ故ニ之ヲ卷首ニ記シ此者流ノ腦天ニ一針ヲ加フ

頭評には、この後の各章で、判決に違和感を示したのも往々にして有ることを付言して置く。

## 「第二章 新任の警部」は、

封建の余習漸く脱却して上を惧れ下を圧するの悪弊（よのなが）に社會に跡を絶ちしは悦びても尚ほ余りあることとなり然し數百年來の遺伝力暗々裡に其風を存するはまた是非もなき次第と謂ふべし

と初めから主題を枕に置いて語られる。本書全体は「凡例」に言う「后来社会ニ出現スベキ」話題、即ち原則近未來予想型の物語が語られるとされるのに反して、例外的に「今を距る七八年前或県の本庁より程遠からぬ市街に警察分署あり」と過去形の物語が語られている風な所に若干の混乱を見るが、おおよその話は、以下のようなものである。

ある日、警部補と巡查十人ばかり詰め合いの分署に配達された新聞の雑報には、昨日警部拜命の記事が載っており、それは月俸五十円の上等の判任で髯尾伸一という名さえ知らぬ人物だった。と、その午後人品賤しからぬ洋服の男が現われ髯尾伸一と名告るので、署長の警部補や巡查皆で礼儀を交わしていると、車夫らしき男が駈け来り兵隊二

十人ばかりと巡查が喧嘩していると報じる。警部が留守を引き受けると言うので、総出で現場に向かうとこれが嘘の知らせ。急ぎ分署に引き返すと警部は居らず、用筆筒の錠前を毀してあつて備え付け金若干が警部の姿と共に消え失せていた。

偕（さて）は警部の新拜命ありしを種に二個の悪奸が巧みたる事なりしチエ残念やと切齒（はがみ）すれども追付ず跡にて考へれば道理こそ其名に似ぬ髯のない洋服を着たソデない人物であつたわい

こうなると話も小嘶のオチめいた終わり方になって来るが、この語り口自体が巧まずして詐欺的行為の有する滑稽の要素を露呈しているものの如くでもある。騙される側は、程度の差こそあれ損害を被るという一点において堪ったものではないが（一歩間違えれば命にも関わる深刻さも確かに認められはするのだが）、その騙り——騙られる関係の状況自体は、往々にして客観的に見る時には、何処か間抜けて可笑しなものに見えてしまふ、そんな詐欺的行為の一面にも不図思いを馳せさせられる語り口だと思ふの



だ。開明派の仏教徒である著者、夢笑道人・萩倉耕造の筆は、こと小説に赴く時には何かしら戯作的調子を帯びて来る。

二頁少しの本文に付された五頁余りの判決文は、「右悪奸就縛ノ上本日公判ヲ開庭セラル裁判官檢察官書記一同定メノ席ニ着シ被告人兩名ニハ守卒付添ヒ出庭ス」云々と始まり、檢察官の法律適用意見陳述、被告人（鷺坂通一・三木友太郎）の弁論、再び檢察官の弁論、裁判官の言い渡し等と続き、頭評には例によつて著者の考えが示されるが、相当煩雜なものになる故、以下、これを略すこととする。

「第三章 親子の対面」の話はこうである。開け行く文明のお蔭には「陸蒸氣」の便りがあるので、函嶺の七湯に保養・入浴に行くのも容易になったが、ただ小田原 湯本 間一里余の松並木は「馬車腕力」に頼らざるを得ない、そこには往來する紳士目当ての「袖乞」達が其処此処に居たのであったが、その中に一人「年令六十路近き老婆」あり、居眠りしていた。と、夫婦連れの温泉行きの人力を止め、男が飛び降りて老婆の傍に跪つき、自ら今井正義、幼名栄太郎と名告つて涙ながらに語るには……、二十二年前

の上野戦争で官軍に打ち破られ、母を本所の屋敷に残し奥州へ落ち行くこととなり、明治三年春本所に戻ったが母の在所は知れず、或る人の媒介で結婚し十六と十四の二人の娘を儲け自分は太蔵省に奉職、ずっと母の行方を探索していたが、図らずも此処で神仏の引き合わせか再会を果たせたのだ、云々とのことであつた。

男は老婆を湯本の福住に連れ立ち行くと、早速湯浴みさせ女房が携えて来た支那「カバン」の中より相應しい着物を着せた（「親子の敬い浅からねば更に元の袖乞老婆にあらず実に人ハ一種の化物ぞかし」と原文にはあり）。さて、この老婆は、元来越後生れで十六七の頃品川宿の遊女屋に身を売られ、一度は全盛を極めるも、ふと旅役者に馴れ染めその妻となり、諸国を経巡る内に色香も盛りを過ぎて男に捨てられ、仕事も身に付かず、親は亡くなり兄弟は他人の始まり、で今に至つていたのだつた。

漢詩（「或人の詩に」として、玉乃九華の「小野小町」が引用されている——筆者注）にも詠まれた有名な小町と同じ末路を辿る所を、何故か母親と敬い厚く持て成されるので、老婆はそのまま母親と成り済ましていた。かくて、四五日を経て新橋の辺りの宿屋に着き、近々官員に嫁に遣

る姉娘の支度にと女房を宿屋に残し、老婆と男と相乗りの人力で銀座通りの呉服店に到る。御召縮緬・南部・博多帯の類を老婆に選ばせ、代価百六十三円の品を一応女房にも見せたいからと、老婆に妹娘の分の選り分けを託して男は反物と消える。番頭が不審がり尋ね見れば、新橋の宿屋は蛻けの殻、男が老婆と共に置いて行った「手提革袋」の中は紙屑ばかり、「老婆を糺せば糺す程曖昧なる返答に止むなく警署へ訴へ出で老婆へ往時に優る囹圄住居とハ夢でないか」と終わる。

判決文で、男は鷺尾勉、呉服屋は一杯喰太郎、老婆は木津根フルと名を明示され、鷺尾は刑法第三百九十条・同第三百九十四条により罰せられるも、フルは刑法第七十七条により無罪放免とされる（男の「女房」については触れていない）。

男は勿論のこと、老婆も母親にまんまと成り済ました辺り、一見憎むべき所が有るようにも思われないではないが、何か寧ろ憐れの情を呼び起こすようであるのは何故であらうか。遊女屋に売られて以来の素性と経歴がなまじ挿入されていた為、更に詐欺のダシに使われてしまう展開に、男の悪者ぶり、悪どさが逆に強調されるからであり、

こと「人の情」の微妙に、しかも、確実に絡んだ物語となっているが故でもあらうか。「おもしろうてやがてかなしき」風情が、この袖乞い老婆の周辺には何処か揺曳している、と言えば良からうか。先の章で《滑稽》について触れたが、《滑稽》は又、裏を返せば《悲哀》の情感をも醸し出す、そんなことを想い起こさせるエピソードを含んだ章であった。

「第四章 紳士の帰仏」は、「欧米の事とし云へば崇拜して模倣たがる我国の風俗に添れ耶蘇教の盛んになるも無理ならねど仏教の衰微するは歎くにも余りあり」と、仏教徒の著者らしい書き出しで始まる物語。

すっかり寂れた大法院という大きな寺に去春京都より転住した聖僧野呂間頑山という大いあり、復旧・修繕に困じていた所へ、若くて立派そうな紳士とその従者が馬車で訪れる。紳士は、旧相馬の藩主華族丸手美作の嫡子丸手清麻呂と名告り、独逸大学に留学中西洋人とのやりとりから無宗教を改め、「アーメン」も虫が好かず、で、先祖より信仰する仏教を奉ずべく帰朝早々縁故ある当寺に参った旨を語り、本堂の畳替えへの協力を申し出る。翌日の朝、畳屋損



右工門方より畳表二百枚持参するも、昨日の紳士参詣して二三枚吟味しては、申し付けた品より下等で一枚ずつ印を付けさせて置いた物でないからと、馬車に残らず積み載せて従者に畳屋へ持ち運ばせる。その後、馬車帰らず、様子を見に去った紳士も帰らず。翌日、勘定を取りに来た畳屋の話と、折柄来合わせた寺世話人の旧相馬藩主と寺とは無関係との話とで詐欺と判明したのだった。

近頃華族様とやらハ沢山出来たが丸手と云ふ名字の方ハ全で聞ぬコハ大変夫でハ全で嘘だらうかと驚き騒いでも行衛を知れぬ跡の考へ用に立ず（中略）ハテ妙不可思議な浮世の中昨日の華族今日ハ騙賊此れハ是れ我門で云ふ唯識所変か否十界五具じやない是れも新奇的舶来か知らん

本文末尾部分だが、ここは「まるで」を洒落たり、「ゾク」の韻を踏んだり、著者の素性を明かしているのも面白い。仏教徒にして『仏教不滅亡論』（明治廿二年三月十一日出版、其中堂刊）の著者、夢笑道人・萩倉耕造の、仏教衰亡の危機に関わる内的必然のもたらしたモチーフを話題

とした章であること、言うまでもない。

因みに判決は、刑法第三百九十条・同第三百九十四条により被告人丸手宇曾磨が、重禁錮一年、罰金十円、六月の監視とされ、屋路馬助は幫助したものとして右に刑法第九九条も加えて正犯の刑より一等を減じたものが言い渡されている（頭評では、「正犯徒犯ヲ分別セシノ一事ニ就テハ果シテ如何ン」と疑義が呈されているが）。

「第五章 正真の銀貨」は、舞台大坂に移つての「金」儲けのお話。

堂島辺の両替店欲野深太郎方へ毎日五十錢銀貨を一個ずつ持つて来て銅貨に両替して帰る男があつた。或る時、男は店主に向かい銀貨が「贋金」とは見えないか、見えなくて安心した、と妙な事を言う……、男は「西洋鍍金」を渡世にする者で、この一兩年に一円が十円になる発明をし、二月余り前より所々の両替屋で試して見るが誰も心付かないので、沢山製造したいのだが資本がなくて云々と店主に零すのだった。欲に駆られた店主は金の用立てを申し出、儲けの配分は山分けと決まり、北野村多憂寺辺の網尾潜右衛門方に早速五十円を持参する。両替屋と鍍金屋と互いに

金儲けに打ち喜ぶが（「心こそ心まよわす心なれ心に心ゆるすな」という沢庵禪師の歌の引用あり——筆者注）、二十日余り過ぎて両替屋が心配して鍍金屋を訪れると、鍍金屋はあろうことかシラを切り、悪口まで連ねて往来へ突き出す始末、両替屋は諍いもならず立ち戻り、五十円だけでも取り戻したくもいい手立て無く、この上は贋金を告訴せんと両替仲間二三軒に鑑定させても皆々正真の銀貨との事、我家に閉じ籠り面白からず日を送る、と、この事早くも世間に泄れ、人の噂に尾が付き羽が生え、両者両三年この方偽金を使ったことになっており、遂には其筋に捕縛された、という話。前半のやりとりには乱歩辺りのミステリーを思わせる雰囲気も漂うが、所詮「欲」と「金」の世界の中、悪事を働いても根から痛い目に遭わねばそれと気が付かず、という人間心理の一面を衝いている。判決文に、欲野深太郎、網尾潜右エ門の両者共に治罪法第二百二十四条に拠り「証憑」不十分につき「放免」とあり、頭評に「兩人ノ心裡ヲ天秤ニ懸ケル片ハ大概相ヒ平均スヘキ悪奸ナリ」と見えるが、シラバツくれの威力（？）か、どうも鍍金屋が得をしている感が有るのは否めない。

「第六章 目的の相違」は、著者に馴染み深い名古屋の話。本町通りの末広座に興行に来た尾上菊五郎一座の芝居を一人見物に出掛けた西国筋の男が、土間半畳を買って見物していると、混んで来た中より年頃二十余りの美女現われ男に寄り添い凭れ掛るので、いつしか腕守りの麝香の匂いに恋心誘い出され（「偕こそ仏典に外面如菩薩内心如夜叉」と誠に玉ふ如く油断のならぬは妹みめよき女なり」云々との一節あり——筆者注）、芝居はねた後美女の跡を慕い行くと……いずれなりと仮りの宿へ誘おうとは思っても手馴れぬ身には何も言い出せず、相変わらず唯追ひ行くに、女も振り返り見つつ、遂には熱田神社の境内の中に入り、繁った樹木の小暗き所に立ち止まる。男は、やっと側に寄り美女の手を握り口説こうとすれば、美女は打ち萎れ涙声で、「誠に恐れ入りました」云々と自分が握り撫でることを明かし、内懷ろより煙草入れ五個ばかり差し出すので、「目的違」の不意の出来事に愕みこころがきつつも煩惱の犬もいつしか消え失せ、抜からぬ顔に言葉鋭く「以後慎しめ」と言い捨てて一目散に帰ったのだった。

勿論、これは「詐欺」の話ではない、「掏摸」の話である。頭評には「本件ハ詐欺犯ニアラサルモ結末詐欺ニ類ス

ルノ事跡アレバ茲ニ掲ケテ注意ヲ促スノミ」とある。因みに判決文の方で美女の姓名は「手永サル」とされており、その後捕縛されての刑は、刑法第三百六十六條並びに同第三百七十六條に依るものが記されているのだが、これも頭評では「○本件ノ所分果シテ当レルヤ否ヤ」と著者自ら半ば疑義を呈しているようなのが、判決を超える客観の視点を重ね合わせて行く本作独自の取り合わせの妙を発揮して面白。單層的でなく多層的なのである。それはとにかく話の方は、色欲から来る男の勘違いに追跡が後ろめたい掏摸の女の勘違い、免角勘違いが元で成った世の中、と著者も言いたげな物語ではある（詐欺と勘違いの類縁性は、しかし、言うまでもないことであろう）。

「第七章 來春の廣告」は、やはり本町通りの或る呉服屋での話。年末、評判良く一入多くの來客の見込まれる正直屋では、掏摸万引対策に無役の手代三、四人を雇い置いていた。或る日の夕方、人品賤しからぬ三十ばかりの男來店し、南部縮緬七子甲斐絹等出させ見繕う折柄、左の袖口より鼠甲斐絹一匹懷中より引き入れたのを無役の手代が見付け、騒動となる。手代が男の懷中より甲斐絹を引き摺り

出せば、男はあべこべにこの店を強盜呼ばわり、今の鼠甲斐絹は一軒おいて隣りの甲州屋で買った品で、「請取書」もあると言う。先刻この男に見せた鼠甲斐絹を調べれば匹數に不足なく、手代の弱り果てた有り様に、男は自分は当鎮台の御用を勤める石田屋助次郎だと名告り、警察も何のその、人に「難癖」を付けて「ロハ」で済むと思うかと凄んで見せる。最前よりの諍論を黙って見ていた番頭は、この言葉を潮にそつと何か男の「袖」に押し入れ謝れば、俄かに打ち解け立ち去る男。番頭曰く「今のは矢張り騙賊の興趣考さ……」、で、こちらも新趣考を思い付き「來年の初売に撤く廣告の摺物」の紙幣に似ているのを幸い十枚ばかり紙に包んで袖に入れたのだということだった。

この章、本文の頭評に次の如くあり。

○本章ハ予ジメ此手段アルコトヲ知リタル番頭アリテ幸ヒニ其厄難ヲ免レタルモノナリ故ニ本書ヲ購読スル者モ亦此二十件ヲ以テ詐欺セラレサルハ勿論ナリト雖モ若シ此理ヲ布演シテ他件ニ応用スルコトヲ知ラズンハ知ル所ノ裏面ヨリ襲來セラレ大ヒニ失敗ヲ取ルコトアルヘシ深ク警戒スヘシ

本書の、実用向けにも充分有益たることを誇示する言い回しであるが、ここは、著者にも確かに「騙賊の新趣考」の一端までを具さに示し得て妙、との自負があつたのであらう。

判決文の方では、刑法第三百九十条と同第三百九十四条で処分されることの多い他章と異なり、「意外ノ舛錯ニ因リ其目的ヲ遂クル能ハザリシヲ以テ全法第三百九十七条及び全法百十二条ニ拠リ本刑ヨリ二等ヲ減ジ」られている。更にその頭評には、「○本件ハ証憑不充分ナレバ治罪法第四百一条ニ因リ放免スヘキ因果シテ如何」の語が見える。

「第八章 広告の効能」は、前章「来春の広告」と連作の關係にある。前章の末に、番頭が「然し斯な奴が来たのハ店の不吉……彼の広告を見て初買に来ねば能いが」と言つて小僧に塩を蒔かしたに拘らず……という話。新年、初商いに賑わう正直屋では去暮の事に懲りて手代から小僧まで用心していると、年頃四十ばかりの男が鼠甲斐絹二匹引つ攫つて逃げ出したので手代が引つ捕える。番頭は「警察へ行つて巡査を呼んで来い」と指示するが、「盗賊」の

声に当所警察の特務巡查琴尾謀はかると言うが入り来り、小崎畑作と名告る盗賊を取り調べるべく縄かけ引き立て行こうとするが、立ち戻つては、その鼠甲斐絹を証拠品として警察へ持ち参るので后刻印形を持つて出頭するよう説き示し、名刺と甲斐絹を引き換えて去つたのだつた。心利いた手代菊蔵が呉服屋正直庄太郎（前章判決文では、「正直庄右エ門」となつていた、兄弟だらうか——筆者注）の使いで来たと言つても警察署では一切覚え無し、という話で。

聞いて愕く手代菊蔵早速立戻り番頭に注進すれば偕は案に違はず初買に来おつたか去年の暮の一匹を僅かの間に倍にしたとは道理で鼠算に縁のある鼠甲斐絹イヤ洒落所でない油断のならぬ世也

前章での番頭の機転の利いた撃退法でめでたく事は収まらず、得てして犯罪者には仲間が居て、且つ、性悪くも執念深い者多く、さすがの正直屋（「庄右エ門」か「庄太郎」か、先に兄弟と述べたが、どうも先代と当主の親子のような氣もしてくる、どうでもいいことかも知れないが、夢笑道人の意図たるや如何？）も一杯食わされて終わる。一頁

半に亘る判決文の方では、他章に同じく犯人は捕縛され被告人として刑が言い渡されていはずののだが、余りに煩瑣になるによつてこれも略そう。が、「洒落所でない油断のならぬ世」なのであるのに違ひは無からう。

## 「第九章 縲綹の布団」は、二頁の本文でその書き出し。

十人十種とは古くより伝ふる諺なるが如何に世へ開られても人間残らず伶俐になり金満家になることは出来ず矢張り智愚混淆貧富雜居にて十人十種所ろか夫から夫れへと分科（マサカ）して数十人数十種との附会ハ儲置き御伶俐にして数百円の月棒を御取なさる紳士もあれど朝早くより起きて夜遅くまで汗水流して働らいても十銭の日当さへ覚束なき貧乏神の子孫あり今仮りに世界の人類を天秤に掛るときハ貧乏の方が八分以上の重量にて世界は貧乏人の共有物と謂ふべきか

で、これら貧乏人の生業はと言えば「職人日雇取人力車輓紙屑拾い鑑鑑買いの類」で多くは出稼ぎ、留守居とは名ばかりの山の神囃左エ門は近所の誰彼と遊び歩いている

のが通例である。ここに、本所在の鑑鑑買ひ津良井倉四郎夫婦というあり。留守居役の囃左エ門阿ベチャは、例の如く遊び歩いては酔い疲れ、寝過ごしては豆腐屋の売声に驚く始末。夕飯の米磨ぎに井戸端に出た処、「小盗賊」が忍び入る。長持の上の布団を畳み返して縄を十文字に掛け、引つ提げて庭に降りれば阿ベチャに遭遇。小盗賊は如才なく、こちら古着商と聞き古布団一二枚売らんと持参した云々と言ひ抜ければ、阿ベチャの方は値段も分らず、見知らぬ者の品など買うは真平御免、と追い出すと小盗賊は悠々と追い出され、否、まんまと布団を担ぎ逃亡したのだつた、という余程お粗末なお話。

判決文では、小盗賊昼間驚助は刑法第三百六十六條および同第三百七十六條により「重禁錮三月二処シ尚ホ六月ノ監視ニ付ス」とされるが、頭評に「○本件ノ処分当レルヤ否ヤ」と第三者の立場・視点（この場合、著者）からの一言が添えられているのは第六章に同じ（後出の第十四、十五、十六章も同じく）。本章は、前半の貧乏人説（齷齪働く亭主と遊び歩く女房の話含む）の比重が大きく、後半の布団泥棒のエピソードとの繋がりに若干無理がなくもないように見受けるが、頭評に言う「留守居役ノ注意ヲ促ス」

のが主題（？）らしい。身につまされるのが前半で、間抜けて滑稽味を醸しているのが後半、ということにもなるうか。

因みに標題の「縋縄るせうの布団」、「縋」は黒縄、「縄」は縛る意、「縋縄」で罪人を縛る縄、また、獄に繋がれることを意味する。盗もうとして布団を縄で縛ったと、捕まって縄を打たれる罪人とを掛けたものと覚しいが如何？

「第十章 寺門の再建」は、又しても寺に振り掛かった災厄の物語。仏教の威徳いたく衰えて本山・末寺の維持に苦しむ昨今、上京区某町の老蓮寺も例外でなく、重立つ檀那の基督教への改宗相繼ぎ、世話する者なくなり、屋根瓦から門、扉、柱悉く惨憺たる有り様であったが、とある日、住持の和尚を室町の豪商山梨倉左衛門の番頭勘太郎と名告る者が訪れる。番頭曰く、本日は主人の代理で参りましたが、不信心の主人も年を取るにつれ信心を始める気になり、「香花院ぼだいしや」の当寺の門なりと立派に建立したく思っている折柄、相場事で思わぬ金が入ったを幸い至急普請に取り掛かりたく、取り敢えず大工彫刻師二三人を連れて見積りかたがた伺いました、と。殊の外の和尚の喜び、番

頭はじめ二三人の人々の客殿で硯算盤借りて談合するに茶菓・昼飯の饗応をなし、午後四時前に皆帰つたのだったが、翌朝未明より職人六七人來つて断りなく寺門の瓦を剥ぎ壁を毀ち扉を外す物音物凄く、番僧が理由を問うという……自分等は河原町古木屋に備われた者で、今度新門再建につき本門は入札払いくること故、昨日当寺の客殿で入札し、落札人古木屋より代金百五十円の内半額七十五円を世話人に渡して今朝より取り崩す約束になつており、自分等も立ち合い承知している、との話。驚いた和尚が、「事実じじから」が違ふからと急ぎ室町の倉右工門に照会すると、勘太郎などという番頭はいないのだった。警署に取り崩し差し止めを願ひ出ても、時既に遅し、寺門は二分通り毀された後だった。「双方の損害一方ならず数々警署の取調べを受けたとは重き／＼仏教の災難コレガ弱りめに崇りめか知らん」と締め括られる。判決は、重禁錮一年、罰金十円、六月の監視。被告人奸太郎の詐欺には違ひないが、頭評では、「然レ氏附帶ノ私訴即チ寺ノ門ヲ破毀シタル損害ハ破毀セシ者ヨリ寺院ハ賠償スヘキモノカ或ハ被告ヨリ直チニ寺院ハ賠償スヘキカ如何」とある。一言以てこれを評せば、本章は正に、泣き面に蜂の章、とも言えようか。



勿論、寺院にとつて、の話である。(先に「庄右エ門」と「庄太郎」というのが二章にまたがって出て来たが、今度は「貪左衛門」と「貪右エ門」！「成程当代貪右エ門殿ハ親御貪右エ門殿と違い……」という表現が本文中に出て来るのでいよいよ厄介なのだが、この辺のだからさ、却つて微笑ましいと放下することとする。)

#### 「第十一章 仏教の余徳」も、標題通り仏教絡みの物語。

西京上京区某町で質屋を営業する金尾や為吉の父為右エ門という天保年度生まれの六十に近い老人、一兩年持病の疝氣も癒えて天満天神へ参詣かたがた大阪見物も保養の一つと人力で伏見に到着し、ここより氣船に乗り移れば自ずと乗合の漸に花が咲く。書生体の男が今度耶蘇教の「新島讓」が大学校を建てるは結構な事、この分で耶蘇教が栄えれば今に本願寺も衰える、と言つた言葉が議論の発端、乗合一同甲乙兩派の議員に分かれ仏耶優劣の論を闘かわせると、賛仏の議員多数で、首領と仰れたは為右エ門であつた。側に居た三十ばかりの秘書官役の男に為右エ門深く悦び、矢立の墨で当座の賞典と町所を書き与え、大阪逗留中は堂島浜通り備後屋へ止宿の旨教えて別れたのだった。一

日隔てて西京金尾や為吉方へ大阪の「態使」<sup>わざつかい</sup>が持つて来た手紙を見れば、父親俄かに「御服痛」の知らせ、電報では尽し難く郵便では手遅れの心配あるので即ち「態飛脚」を寄越したと、着替への衣服四五枚を持参の上大至急下阪されたこと、更には、当人の認め置いた所書きを添えるので疑念なく下阪されたく、使いの者には汽車賃とも金一円五十銭与えるべきこと等が書き認められてあつた。読み終つた為吉は、飛脚の話聞き取り賃金一円五十銭を渡し、着替えとして黄八丈の綿入れその他高値の衣服五六枚を飛脚に託し、自らは医者と共に汽車で大阪に向かう……、と、元氣でいる親父に実は詐欺であつたと漸く判明。親父が為右エ門「自筆の所書」を「早速金札と引替に出懸けしは穎敏な騙賊」<sup>すばや かたり</sup>然し大難が少難で済んだ是れも仏教余徳の有難迷惑」と締められる。

判決文には、刑法第二百十條第二項、同第二百十一條、同第三百九十條、同第三百九十四條、同第三百九十五條等が動員されているが、最終的に「二罪以上俱二発シタルヲ以テ全法第百條二因リ一ノ重キ第二ノ所為ニ対スル刑ニ從ヒ重禁錮四月ニ処シ罰金五円ヲ附加シ尚ホ監視六月ニ附ス」となっている。

本文の頭評に「○本章ハ其好癖スル所ヨリ詐欺セラレシモノナルガ其人ノ性質如何シヲモ認知セス妄語スルノ結果」云々とある通り、住所・氏名・職業その他、今日所謂個人情報とやらいうものを素性も分からぬ見ず知らずの人間に容易く教えるべからず、との教訓を含む章である。油断大敵、昨日の味方は今日の敵（になるかも知れず）、人を見たら詐欺と思え（？）……兎角に生き辛いのは何時の世もどうやら変わりにないらしい。

「第十二章 煩惱の結果」は、「依田学海先生の著作ものされし文覚上人勧進帳を市川団十郎ぬし始め上等俳優やぐしや撰抜きにての興行」とて、盛況を極める新富座から話は始まる。見物の場所に困った七つ程の娘と乳母に棧敷の片隅を譲って親切を尽くす夫婦あり、乳母より話を聞いた娘の親は浅草で両替を業とする豪商若松屋智右衛門という者、予て礼をと思うが当の相手が分らない。と、四五日過ぎてその男の人力で店前を通り行くを乳母が見付け、奥の間へと請じて歓待する。そこへ小僧来って、横浜港英国商館の番頭を探して神田の古物商小八郎なる者が店に尋ね来たと告げる。小八郎は「旦那御嘶しの水晶」が見付かったが、仏国の商

館も聞き出して来たので少し買い被ったと言う。その値四百円。仏国の商館の件もあり、明朝でなく今日金が必要だと言う小八郎と帰ろうとする番頭を押し止め、家主は明朝まで四百円を立て替えたいと申し出る。紙幣を渡せば小八郎は水晶を置き帰り、番頭も銀座通り尾張町林屋に止宿する者で横浜は居留地三十八番英商館に奉職の身と明かし、英国へ送る水晶を預け置き、明朝金を人に持たして引き取るとて帰宿する。家主は水晶を箱に納め封印させて預り置くも、翌日人も来なければ、問い合わせた宿も「虚事そと」、何時しか世間の知る処となったのだった。口惜く思った家主は「兼て評判能き岩谷某（「天狗煙草」で有名な岩谷松平ならん——筆者注）等の店頭演説」が二十日夜銀座で開かれるのを聞き知り、弁士に加わり、「騙賊かたりを注意せよ」と題して自らの体験を弁じ、用意した偽水晶を粉に打ち砕いて新聞にも取り上げられたのだった。すると、二日ばかりを経て例の商館の番頭と名告った男が若松屋へ現われ、あの夜から大阪に急遽派出し昨夜帰ったので、金を持参した故預けた水晶を請け取りたい、と申し出した。家主は紙幣を請け納め、その節念の為封印されたままの（本物の）水晶を差し出して事無きを得たのだった。水

晶を砕いた噂を聞き、更に何程か取り込む巧みも、若松屋に「楠公諸葛公の智恵を絞り出され裏を設<sup>か</sup>れて終に元金を取返された」一段、「騙賊の厄年若松屋の誉れ然し転ばぬ先きの用心に若ず」と結ばれる。

都合六頁から成る本文に久々長目の三頁から成る判決文が付されているが、「津間良内（商館ノ番頭ニ扮セシ人名）」等の巧みな詐欺的仕掛けも、遂に皆「証憑不充分トシテ無罪放免スル」（頭評）の一語に尽きよう。（判決文では、二つの案件に分ち、共に「予審ナラバ治罪法第二百二十四条公判ナラバ全法第四百一条ニ依り免訴又ハ無罪ヲ言渡サルヘキモノトス」とされ、「未遂」や「自首」にも触れているのだが、煩瑣を嫌つて今これを省く。）

この話、結局、家主の智<sup>ち</sup>右衛門<sup>ゑもん</sup>が詐欺師達よりも一枚も二枚も上手だった、というお話で、名は体を表わすを実地で行った頭脳戦、智の逆転劇が痛快な章であると言えよう。詐欺を巡つて劇中劇ならぬ劇中演説が組み込まれている趣向も又面白い。

「第十三章 新宅の披露」は、次のような枕に始まる。

世<sup>うつつりかわ</sup>の変遷<sup>さま</sup>る状況は借家にまで影響<sup>およぼ</sup>すものにて昔時<sup>むかし</sup>は裏店<sup>ママ</sup>永屋に限る様なりしが当<sup>いま</sup>今は玄関付綺麗なる家の需<sup>か</sup>用<sup>ママ</sup>多く已<sup>ママ</sup>が住宅<sup>すみか</sup>の綺麗なるを他人<sup>ひと</sup>に貸<sup>ひ</sup>して他人<sup>ママ</sup>の永屋に移転<sup>ひきうつ</sup>る者さへ少なからぬも御役人の交替<sup>でかわり</sup>繁ければなり

で、近い頃東海道筋第一等繁昌の土地、杉之町に控え家四五軒を持つ中村芳兵衛方へ「書生体の男と馬丁体の男」が来つて、今度〇〇県士族山屋巧一が転任するからと、屋税一ヶ月三円で玄関付きの一軒を借りる相談が纏まり、二人は直ぐ様掃除に標札掛け等し、一人が本町に名ある呉服屋の鏡屋へと出向く。反物をとの依頼に、先が官員と聞いた番頭は小僧に絹布類数十反を持たせ遣る、と、玄関に新聞を読んでいた書生は小僧の風呂敷包みを請け取つて、主人に見せるからと奥へ持ち行き音沙汰無きこと一時間ばかり。為て遣られたと気付いた小僧の泣き声にて幕、という話。「段々開<sup>ひ</sup>られる世の中ゆへ騙<sup>かた</sup>賊<sup>たり</sup>の手段<sup>てぎわ</sup>も上達すれば何商売に限らず此呉服屋を屋号の通り鏡にして用心こそあらまほしきことなり」と締め括られるが、頭評は以下の如し。

○本章ハ正当ノ營業ヨリ此厄難ヲ蒙ルモノナレトモ油断ヨリ来ル論ヲ俟ス且ツ近來新聞紙ヲ閱ミスルニ此段ニ僱ル者尠ナカラス最モ注意スヘキコトナリ

判決は、刑法第三百九十条および同第三百九十四条により重禁錮五月、罰金五円、六月の監視に付すというものが、これは、成り済ましによる典型的な騙取のケースで、本書「序」に言う「余習」に係る詐欺の話と覺しい。頭評に「近來新聞紙」云々と見えるが、却つて随分と古典的な手にも感じられるし、恐らく實際そうでもあらう。が、本章の冒頭にも見られた通り、「御役人」＝「官員」の權威を借りた、人の行き交ひ・移動のもたらすドラマというのは、これもやはり「近代」らしい詐欺の形態と認めてよいと思われる。

「第十四章 浦島の妻君」は、前章と大同小異、やはり呉服の騙取に纏わる話で、場所も同じ本町通りの連作風に綴られている。本町通り上等の「旅舎」に止宿する客が呉服入用との使いに、御召縮緬糸織南部或いは筑前博多の帯

地等を撰り分けて風呂敷に包み、番頭に「此程鏡屋にては騙賊に遭ふたとの事直々御客に見せて商いに忽滑るでない」と指図を受けて小僧が旅舎に到れば、人品賤しからぬ三十ばかりの「婦人」と「支那革袋」、婦人は御召縮緬黄八丈一匹ずつ博多帯一筋その他を購わんとて、正札の六十一円五十銭の「端銭」だけでも引けないかなど語らいつつ、俄かに思い出した様子で更に七子の上等を取って来るよう所望する。小僧が売り残りの品を持ち帰り、改めて上等の七子二三匹を旅舎に持参すれば、（読者にとっては案の上？）婦人は居らず売る約束の品も無し、近所に見せる人があると店に言い置いて出て行つたのを、支那革袋を心当てに二時間待つたが不審に思い、店に問えば先刻着いたばかりの客で宿帳には越後の国新潟港某町六十五番地平民島田ウラとあり、番頭に注進、警吏の派出と相成つたが、例の支那革袋の中はと見れば、ただの紙屑が捻じ込んであるばかり、「浦島のご事も思い出されて嘸かし開けて悔しき事なんめり」と結ばれる。

判決文は、前章とはほぼ同じ経緯ながら、重禁錮八月、罰金十円、六月の監視に付す、とされている。本文の方の頭評には、「此手段ニ僱ル者豈ニ唯リ呉服屋ノミナランヤ万

般ノ商業家皆然リ且ツ旅宿ヲ營業トスル者深ク警戒スヘシ」と見え、前章と併せて、当時金目の物として最も詐欺的行為の対象となり易かつた小物の一つが「呉服」であつたことをつくづく思い知らされるエピソードではある。當時の現実をよく反映して、本書の実利的側面を代表する二章だつたと言えよう。「鏡屋」の一件を番頭が心付けても、尚この有り様、詐欺に追いつく用心なし、と言つたところか（因みに、これは現代も全く変わらない状況で）。

「第十五章 意外の仁術」は、「欧米の學術技芸陸続と輸入したる中に就いて最も我國人の習い熟せしは医学の由にて」云々と始まる、医者が主人公のお話。東京の近県に名医あり、學術優れ徳高く俄かに有福の身となつた名医だったが、その日の仕事も為済まし晩酌の酔いに熟睡して夢見ていると、「トン／＼／＼」雨戸を敲く音がする。一里余り離れた根堅村の金田六左エ門よりの使いで、日頃よく行き届いた近郷の大富豪でもあり、午前一時ではあつたが「秘書官（妻君と知るべし）」の勧めもあつて、不在の車夫の代わりに血氣盛んの使いの男二人に腕車を挽かせ往診に出る。と、根堅村への本道を岐路に入り人里離れた森の中

古祠堂の鳥居前に車を付けて、二人は懷中より短刀を取り出し「已おひ等ハ旅稼りぎのトン／＼（強盜と知るべし）様だが……」云々と正体を現す。医者は大人しく「金側きんかたの時計」と「紙幣きず三十円許ばり」を渡して難を逃れることを得た。逃げ去る悪奸の後ろ影を見遣りながら、医者の怒りの声、左の如し。

名医 駄畜生め待て／＼……「妻君 旦那／＼……どふかなさいましたか……」医 ハアー今のは夢であつたか……然し能くある手段てだから夜半よなかに呼よびに来て油断はならぬは……尤とも是れでハ詐欺にならぬよふだ……「著者 ナーニ私わちが読者よみ者を詐欺だましたのさ

一見、呆れた終わり様だが、こんな處で夢オチ、これはこれで面白い（夢笑道人の名、又、空しからずで）。著者の唐突な顔出しは本書でこれが初めてだ。右に引き続いては、「石果シテ夢ナリセバ判決ヲ要セサルモ世上此ノ如キ悪奸ナシトセス否先年此事アリシヲ新聞ニテ確知セリ故ニ之ヲ律ニ擬スルハ左ノ如シ」として判決文が付け足され

ているが、これは略す（「有期徒刑十二年ニ処ス」とあり）。本文の頭評には、「○本章ハ詐欺ニ非ス然レモ欺罔ニ起リタルヲ以テ茲ニ掲グ」云々の断り書きもあるが、いづれにしる本書一冊の中でこの章が破格・破調たること間違いない。夢の中にまで侵入する欺罔ないし詐欺的行爲——。若干反則めいてはいるが、全体に変化と面白味をもたらしているの、大いに許さるべき趣向と私は考へる。因みに、強盗が自らを「トン／＼」と言ったのは、兩戸を敲く音「トン／＼」から来ていること、言わずもがなでもあろうか。

「第十六章 宴会の使者」は、新年会の話。書き出しは、以下のようである。

実に光陰は矢の如く廿一年の暦も今ハ早や紙屑籠に投げ入れられて誰一人不憫と思ふ者なく已が身の歲月も重ね／＼て間もなく此暦に均しく土穴に抛げ込れることさへ心付ず来る新玉の春をのみ祝いぬる人の果なさと聖人を氣取つた所が拾九世紀の烈しき世界には矢張り通用にならず物事当世風に倣ふのが世と能く推し

移る真正の聖人なりと

町内の改進黨が柳橋の忘年会に引き続き、二十二年も七日となれば新年宴会なかるべからずと、正午十二時吉原にも近い浅草放遊館（実在の鷗遊館がモデル）——筆者注——に三十六人が集まつた。祝辞、席上演説もそこそこ、「紅裙」五六人が興を添え、夜は一同吉原へと押し出したのだった。「話頭転換」町内の家々では妻君の事務忙わしく「どふか来世は男に生れて見たい」と余計な苦勞をしていたが、「車夫体の男」現われ、放遊館から頼まれて来たとして太郎兵衛、吉太郎、八五郎……都合三十六人の妻君・母親より上等の半纏綿入れの類取り集め、そのまま逐電したという騙賊のお話。

新年早々縁起が悪いと云ふもあれば未だ節分前だから厄落としと断念めろとて西の海へ「サラリ」と云ふ旧弊家あれば否や夫れよりは已れが厄払いの口上を仕やう斯様な奴ハ監獄署へ「サラリ」是れも江戸ッ子の氣性を捨て洒落かも知れん



と終わるが、正直「サラリ」の洒落はちと分かり難いが、どこか南新二を思わせる書き振りだ。判決で、馬鹿野太郎兵衛以下より衣類を騙取した留寿江喜太郎は、重禁錮五月、罰金五円、六月の監視の刑に処すべく記されている。

「第十七章 宴会の勘定」は、前章からの宴会連なりで、これも今や片田舎から都会まで大流行りの宴会を巡る詐欺の物語。東京より西の或る都会の旅館で宴会をも引き請ける伸天閣へ四十ばかりの身なり立派な官員風の男入り来り、自分はこの度東京より転任する事になったので明後日一人前の会費二円位の親睦会を開きたい、と切り出す。客は「招状」ならず「廻状」を書き認め、二十三年国会開設の準備を口実に当地の紳士豪商百数十名に参加を促した。会費は発起者田中守一負担とし、重立った五六名の名には自ら参加の尸点を施し後に自ら出掛けて招くこととした処、承諾者は百十三名と決まった。十五日正午の会は盛大であったが、来会者は、この饗応・御馳走で「諺に蝨で鯛と云ふ」後々否と言われぬ依頼は御免と、借りを作らぬよう逆に先を越して御馳走に相応しい報酬を与えるべく、皆それぞれ何円という祝儀を田中に渡したのだった。数日し

て各人の宅を伸天閣の番頭が訪れ、懇親会費金二円の請け取り書きを差し出したので、これは田中より支払うべき筈のものとも誰も思いつつ、些少の金に愚痴・苦情も言い兼ねて各々不本意ながら支払う破目に。

宴会の日紳士豪商より田中に与へし金高は四百五十余円にて（中略）悉皆懐中に入れてへー左様ならと（是れが濡手で粟の攫み取りに引き反へ蝨で鯛を釣せぬ紳士の智慧も餌のない鉤で釣れたとは太公望の子孫か知らん

判決文は、やはり刑法第三百九十条と同第三百九十四条に因り、重禁錮四月、罰金五円、六月の監視だが、頭評には珍しく「異論」が掲げられ、そして、斥けられる。以下、全文。

○本件被告ノ所為ニ就テハ左ノ異論アリ 宴会ノ費用ヲ支弁セサルト雖モ金員ヲ騙取セント計図シタルニ非ス唯タ人ノ祝儀トシテ差出スヲ請取リシハ刑法第二条ニ因リ無罪ト余之ヲ取ラス

序でながら、本章冒頭の頭評も見て置くと、そこには「○本章ハ最モ新趣考ナリ然レ后来必スシモ比類ノ詐欺輩出スヘケレハ予シメ警戒セサルヘカラス」とあった。確かに新時代——国会開設前後——ならでは、新手の詐欺ではあるだろう。これまた、用心したのが却って仇となった形で、本来「或る伶俐なる紳士」の発案にかかるものであっただけに、なまじの智恵は却って災厄をもたらすことも有る、ということか。

「第十八章 途中の放免」は、本文冒頭の頭評に「○本章ハ封建ノ余習ヨリ来ルモノナレト法律ヲ知ラサルノ責預ツテ力アリ」云々と見える話で、西国筋の繁華の土地に、初代藤右エ門が紙屑買いより成り上った日の出屋という八百屋を営む金満家があつて、二代藤助は質両替に営み代えして成功を収めていたが、四十五で病死する。忠義の番頭直助は、その子息蕩太郎と未亡人を守り立てる、と、天性伶俐な蕩太郎二十五の春、遊芸仲間の交際で或る遊里に誘い入れられて以来、娼妓白妙に打ち込んで散財一方ならず、警察も不審を起こし内々探偵していたのだった。処へ

店に二人の男入り来り「当警察の特務巡查」と名告り、当市中に近来「贋紙幣」がチラホラ見えるが、当家蕩太郎の錢遣いに不審が掛かり取り調べに派出したのだ、と言う。現在の紙幣を出せとのことに番頭は金員七百二十七円を探偵の前に並べれば、念の為一先警察へ持ち参るとて紙に包み懷中したのを、再び取り出し番頭に封印させて警察へ同道する。警察の一丁前で探偵一人は跡へ引き返し、暫し茶屋で待つてもやがてもう一人の探偵も様子見にとて姿を消す。午前十時から午後三時まで待っても二人共戻らず、番頭が警察へ行けば、警吏は知らず全くの贋者と判明。番頭は店に帰り懷中の風呂敷包みを取り解けば……「探偵が包みたる金員の封を切り抜き見ればコハソモイカニ何時の間にか新聞紙と摺替へあり儲は一旦懷中せし時の手品と知れ」る。蕩太郎聞いて、「仮令ひ探偵吏にせよ濫りに他人の財産を捜査する事のならぬのは最初より知れた事に」と規則を弁えていても後の祭り、という話。

判決は、犬尾志多郎上戸代蔵共に、第一特務巡查の詐称は刑法第二百三十二条、第二紙幣の騙取は刑法第三百九十条と同第三百九十四条に因り処断されるべき処、「二罪俱発」に係るを以て「一ノ重キニ從テ処断ス」ということ

で、重禁錮一年、罰金十円、一年の監視に附す、とされる（頭評では、「刑法第三百七十八条ニ照ス重罪犯トセンカ猶ホ恐喝罪ナランカ果シテ如何」とあり）。

詐欺に「手品」。騙りには、口先だけでなく手先の器用さも必要なのだ、と語っている章でもある。一方、騙られない為には「法律」の智識も必須なのだが、当人不在、その他折角の智識も活かされないでは意味が無い。また、智識有り、用心有っても、詐欺に為て遣られることの多いこと、前の方の章で既に見て来た通りである。詐欺力強し。

「第十九章 時計の鑑定」は、東海道中最も人口多き某地の遊廓での物語。才子の楼主が元は揚屋だったのをこの地有数の貸座敷と成し上げた高根楼へ、或る夜、年の頃二十三四の田舎の金満家の子息と見えるが登り、娼妓花里に金三円七十八銭を遣い、二日後金三円余、また二日後金五円余と遣つて紙入れより金三円を取り出し、仲居に二円三十銭借りたいと申し出て、「金側の時計」を添えて渡したのが先ず話の発端で。楼主は時計を見て二円の価値は有るとしてこれを受け入れる。と、その後商人体の男二人登楼して酒の間の問はず語りに時計の自慢話をするので、仲居が

先の話をすると、その男は本町通り伊太利屋という当地第一の時計商の番頭だと言うので、楼主が例の時計を鑑定させると金二百円迄なら直ぐにも引き取りたいとのこと。楼主が来たらば周旋しようと言えば、嘉太郎と名告る番頭頻りに周旋を頼み、手付けの金五円を無理に預けて帰りに行く。次の夜、以前の客来つて金を仲居に返せば、楼主時計を譲り受けたく申し出るが、八十円ではならぬ百円ならばとのことで、楼主は金百円で時計を買ひ取つたのだった。百円儲けたつもり楼主は、早速伊太利屋に使いを出す、そのような番頭は居ないとの返事、やがて自ら尋ね行けばやはり居らず、不審晴れずに鑑定させればどの時計屋も「真鍮に鍍金」の「昔時流行りし袂時計」で二三円の品とのことに始めて詐欺と気付いたという顛末。欲をかいて古物商でない身が貸席の規則さえ犯して罰金を科されたのだった。

これも判決は、刑法第三百九十条等により、重禁錮六月、罰金八円、六月の監視となるが、本文冒頭の頭評に、「貪欲」にかかる詐欺に用いられる物件は、「唯り時計ニアラス即ち諸商品都て此手段ヲ用ユルコトヲ得ヘク殊ニ書画骨董品ノ類ニシテ価額ノ易知スヘカラサルモノハ最モ注意

スヘシ」と見える。欲心有る処、全て詐欺に繋がらぬ物は無い、といつそ拡大して言つてしまえるような氣もする、この一段である。

最終章の「第二十章 媒介の口上」は、標題通り「媒介なかつど口」に係る詐欺のお話。東京向島に小綺麗な格子作りの平家に年老いた夫婦が安樂に暮していたが、これは「嫁婿の周旋屋」で、普通の周旋料のみならず持参金ある場合はその十分の一の手数料を申し受ける者、出雲屋夢之助と言つた。ここに神田区某町の〇〇県士族花下長十郎と言う役所勤めの男、月俸は六十円だが三十近くて未だ独身、負債が数百円あつたのが出雲屋を訪れ、二三百円持参する婦人の世話を依頼すると、出雲屋は横浜居留地七十五番館の英国人に六七七年寵愛を受けた婦人がいて、この頃英国人の帰国に際し、金千円を貰い親兄弟に与えた五百円の残りを持参の「洋妾らしやめん」ありと応えて話が纏まる。三日後の夜、出雲屋の連れて来た婦人と婚姻の儀式行われ、花下は婦人の持参金が氣になりつつも、先ずは出雲屋に手数料一割の五十円を渡したのだった。二十七八が二十四五にしか見えない別品の婦人と新夫婦鴛鴦の契り浅からず当分は持参金の事も

沙汰無く打ち過ぎたものの、月日の経つは速し、早くも三十日になり花下は所々の買掛りより負債の割済み金まで払わんと妻君に語らえば、妻君は洋妾でもなく一文無し、二人愕きかつ憤る処へ来るは米屋酒屋炭屋新屋の勘定書き、家賃の取り立てさえるに、妻は、花下が地所持ちで妻の親の世話の約定もあると聞かされていると述べるので、花下は……「去るにても余り非道ひどい為媒介口と云ふたかどふだか十分一の五十円丈けハ媒介口でも目的あてになりしとぞ、」でお仕舞い。

判決文は、二頁に亘り「裁判言渡」の示される（婦人は、名前尻野カル）も、例の刑法に因つて重禁錮六月、罰金五円、六月の監視に処すとされる。続く、本章（延いては本書）末尾の一文は、以下の如し。

右裁判を言渡され夢之助は殊の外打萎れたるも無理ならず是迄向島なる小格子家に住居しも今より佃島なる大格子の中に赴く身となりしは実に禍福わざな糾あざなへる縄の如く喜憂ハ物の表裏の如し福貴を希ねがふ人の心も少し踏み間違るときは忽ち禍憂に陥る夢の世の中夢に夢みし永物語りを暁天あかつきに鳴渡る詐欺否鴛と裏表なる鴉の声

に呼び醒され耳を敬<sup>そはた</sup>て能く聞けバアホウ（阿房）（  
と云ふにぞ一先筆<sup>ひとしづ</sup>を擱くになん

後半の締め方は、同じ南柯堂夢笑道人の処女作『決闘状』と酷似して「夢」で終わるが、夢笑道人・萩倉耕造お気に入り<sup>お気に入り</sup>の締め方と覺しい。話戻つて、第二十章については、本文冒頭の頭評に「○本章ハ色ト欲トノ兼情ヨリ起ル珍奇ノ事件」「是レ則チ自由結婚ノ行ハレザル邦土ノ惡習と謂フヘシ」とあるのに尽きているのだが、「婚姻ノ媒介」が一概に古くも悪しき風習とも言えないだろう。問題は、それが「金」に関わつて間違いが起こる處に有るのだから。

以上、あり得べき詐欺の種々相を二十の章に亘つて見て来たが、いつの世も詐欺を始めとする犯罪というものは時代を映す鏡、明治は明治なりの良くも悪しくも（悪しくも悪しくもカ）智恵と行動力（活力？）が描き出されていたのだつた。実用向けとフィクションと、小説と判決と批評と……擬らした工夫に南柯堂夢笑道人萩倉耕造の筆は、遊

戲的分子を多分に含みつつも、初々しく且つ逞しい自在さを十分に發揮していると言つてよい。『決闘状』『詐欺』と續いて、以降、小説的作物には筆を絶つた道人だが、残りの人生を信仰、布教活動に投じ、そちらでまた旺盛な筆力を揮つた道人の存在を、今日我々は改めて評価すべく記憶に留めて置いてよいのではあるまいか。本作の如き、今日に至るまで、警世の意味も含め、二十通りもの〈詐欺〉事件を小説化した試みは後にも先にも無かつたのだから。『詐欺』一冊取つても、興趣は尽きない。（完）

#### 注

（1）拙稿「南柯堂夢笑道人『決闘状』ヲ讀ム」（『成城國文學論集』第三十五輯 平成二十五年三月）

#### （付記）

本文中、原文を尊重した為、漢字の字体・表記等に不統一な所があることをお断わりして置く。

尚、本稿は、平成二十三年度成城大学の特別研究助成「漢字テキストの表象と日本文化にまつわる基礎的研究」による成果の一部である。